

批評・紹介

スタイン卿「インドとイランの考古學的踏査」

Archaeological Reconnaissances in North-Western India and South-Eastern Iran, carried out and recorded with the support of Harvard University and the British Museum by Sir Aurel Stein, Antiques examined and described with the assistance of Fred. H. Andrews and analysed in an Appendix by R. L. Hobson. London, 1937.

スタイン卿の探検と云へば、直ちに我々はかの有名な三回に渉る新疆地方のそれを思ひ出すのであるが、卿の考古學的研究は新疆ばかりではなかつた。西北支那に於けるかの大旅行と大收穫は卿の名を不滅にしたには相違ないのであるが、卿が西北印度に於ける諸調査もその功績は我國に於ても注意せられなければなら

ない。卿の計劃したる最後の新疆旅行が圖らずも達成するに至らなかつたので、卿は今度は西南に轉じて印度から波斯へと向つた。その調査旅行の報告が此の大冊となつて我々の前に持ち來たされたのである。

卿は最初の調査旅行以來、歴山大王東征の史蹟に關心を持つて居た。西北印度に於ける諸調査は之に關係を持つてゐる。さうして其の研究に玄奘三藏西域記が重要な資料を含んでゐたのと、十九世紀、二十世紀の交の新疆探検の競争とが、終に卿をして再三再四玄奘の行路を追はしめてゐたのであつたが、玄奘行路と歴山征行の交錯せる西北印度の研究は矢張り卿の意圖を脱しはしなかつた。玄奘、歴山の間に點出する法顯マルコポーロは亦卿の問題となり、而して西南行するに従つては、古典地誌家アラブ地理家も關係漸く繁くなる。卿は此の報告の旅行後、更に古代イラン文明の地に進入してその豫備報告も出てゐる様である。

本報告は千九百三十年に第四回新疆旅行を企圖し、八月にカシュミルを出發して新疆に這入つたが、支那側の種々なる妨碍によりタリム盆地を一周したのみで引上げ、印度イラン旅行に變更し、一九三一年から

一九三三年迄の當旅行の報告である。新疆旅行は出てゐない。この旅行記も早く見たいものである。卿の著「古代中亞の遺路」に僅かに觸れてあるを見るのみであるのは遺憾である。

三年に渉る旅程ではあるが、自ら三期に分れる。第一期は本書の第一章第二章で西北印度である。第一章はパンジヤブに於けるアレキサンダア戦役。こゝでは歴山王のヒダスベス河の渡河戦場の研究が中心で、ジャラアルプスが其地點ならんと斷定し、歴山王が到達した極東地點ビラス河邊の聖壇建設地を調査してゐる。第二章は鹽山及びシヤアプル地方の古蹟。西域記の僧訶補羅國の研究が中心で、城の東南四五十里の無憂王の建てたと云ふ石の卒堵婆の所、白衣外道本師初説法の所、等を探りて今の所謂ムルチなりとし、僧訶補羅の城をケタアスの西北三哩なるヅルミアル村に比定する。尙ほミアンワアリイに進み、法顯の毗茶は今のベエラに當ると云ふ。これにて第一期は終り、ペルシアに向ふ。第二期は第三章より第五章に至る。第三章はペルシアのマクラアンに於ける探検。ダムバコオの墓地群の發掘、ギイチ河畔なる傳説上のジヤムシイ

ド王城の發掘、トレミイ、アリアンなど古典地理家に知られたるチイズ港の調査、などがある。第四章はバムプウル盆地。史前遺物の蒐集、クラアブの墓地の發掘でササ、アナウ出土に比すべき彩色土器等の收穫、チヤア・フサイニイの遺蹟の調査等。第五章はルウドバアル及びジイルフトへ。ベエキルド附近の所傳ダキアヌウス城市を調査して、こゝがアラブ地理家のジイルフトであると斷じ、マルコポロが通過したカマヂ市も此邊で、レオバルレスは今のルウドバアルにして、皆ジイルフト、ルウドバアル地方に記事がよく當ると云ふ。こゝで一たん中止して歸英する。第三期は後三章である。第六章はケルマアンからバンダグ・アプバアスへ。ケルマアンを立つて、歴山軍の歸路を古のホルムズ港へと訪ねる。ミイナアブ河畔のミイナアブの附近の古蹟を探るが地勢の變化で確證が少ない。第七章からは波斯灣の岸を北上し、スライマアンの記すシイラアフを、今のタアヒリイ村の西一哩半の所に探つた。第八章はガレエダアルからブシイルへ。到る處に古蹟を探りつゝ遂にブシイルに止まる。ブシイルからシイラアズに至つて、獨乙のヘルツフェルド博士、佛

のゴダアルの兩考古學大家に會ひ、イラン入りの手續をして印度へ歸途についた。此年一九三三年の夏にイラン入りの爲め再びシイラズに歸つて北上して行つた。以上が極めて粗雑な然も僕にのみ興味有る所の素描である。

附録Aはホブソン氏の蒐集陶器に關する報告。Bはスタイン卿が新疆第四回探検中止に關するタイムス紙編輯者に與へたる手紙。支那當局との交渉始末であり支那の不信なる態度がよく分る。次は蒐集古物表と索引と陶器の圖録である。

尙ほ卿の助手となつて同伴したのはライデン大學ケルン研究所のフアブリ博士で、卿は博士の前途を非常に祝福してゐる。

我々はスタイン卿の不屈不撓の調査旅行にいつも敬意を表したものであるが、今猶ほ進んで止まざる卿の熱意と其後援者の好意とには羨望の外ない。卿の企圖した玄奘、歴山、マルコポロの路程研究は恐らく卿に於て劃期的に基礎を定むる事になるだらう。卿が學界に與ふる資料も蓋し前古未曾有の範圍に及ぶであらう。驚嘆の外はない。

〔石濱純太郎〕